



びび

沖縄国際大学
図書館報

第56号

2022(令和4)年4月1日発行

目次

施設案内 2～3

よい司書(図書館員)ってどんな人?
図書館長 山口 真也 4

レファレンスサービスを利用して新資料を発見!
地域文化研究科南島文化専攻2年次 宮里 初枝 4

法学部生の一例
法学部地域行政学科2年次 金城 彩華 5

大学図書館をもっと身近に
総合文化学部日本文化学科4年次 大城 アリーシア さくら 5

大学図書館のサービスを利用して
総合文化学部日本文化学科2年次 石川 舞 5

学科長が新生入生に薦める5冊の本 6

科目群責任者が新生入生に薦める5冊の本 7

2021(令和3)年度図書館活動 8～10

LIBRARY TOPICS 11

令和3年度書評・映画評賞審査結果 12～22

令和3年度書評・映画評賞受賞作品

最優秀賞
書評 「不条理の雨の中で」
総合文化学部 人間福祉学科3年次 城間 唯 13～14

優秀賞
書評 「時代を映すフィクションの魅力」
総合文化学部 日本文化学科3年次 仲本 陽 15～16

書評 「自分らしく生きるとは何か」
総合文化学部 人間福祉学科3年次 赤嶺 桜 17～18

書評 「『利他』と『利己』を巡るメビウスの輪」
地域産業研究科地域産業専攻1年次 玉那覇 長輝 19～20

書評 「『本と鍵の季節』からみる物事の本質について」
総合文化学部 日本文化学科1年次 名嘉真 里歩 21～22

2020(令和2)年度図書館統計 23

2020(令和2)年度図書館利用状況 23



開館時間

曜日	開館時間	3階AV・PCコーナー
月曜日～金曜日	8:00～23:00 ※8:00～8:30は1階のみ開館	8:30～22:30
土曜日	9:00～22:00	9:00～21:30
長期休暇期間	平日	9:00～21:00
	土曜日	9:00～20:30
日曜日	10:00～18:00	利用できません

休館日

- ・国民の祝日
- ・定例休館日:毎月第1金曜日(ただし、定期試験期間は除く)
- ・本学創立記念日(2月25日)
- ・慰霊の日(6月23日)
- ・年末年始、その他学内行事などによる休館は、その都度図書館掲示板、および図書館Webサイトでお知らせします。

※開館時間などの変更は、その都度図書館掲示板、および図書館Webサイトでお知らせします。

施設案内 ～さまざまな学びに対応する図書館を活用してみませんか～



学習室3 ラーニングcommons(4階)

パソコン・プリンターを設置。個人学習の他、グループ学習やディスカッション学習も可能です。



AVホール(4階)

映像資料などを用いた講義、上映会など多目的に利用できます。



PCコーナー(3階)

標準的なソフトを搭載したPCを揃えていますので、レポートや論文の作成などに利用できます。



グループ学習室(2階)

区切られた空間で、ゼミの仲間や友人達と話し合いながら学習できます。



閲覧室(1階)

外からの光が差し込み明るい雰囲気の中、個室感覚で利用できます。



閲覧室(1・2・3階)

ゆったりとした机で、レポート作成や自習などの学習に集中しやすい落ち着いた環境です。



ブラウジングコーナー(1階)

国内主要新聞や地方新聞のほか、週刊誌等の一般雑誌を配架しており、ソファでゆっくり読むことができます。



書庫(地下1・2階)

新聞、学術雑誌、大学紀要等のバックナンバーやマイクロフィルム資料室、貴重図書室があります。



研究個室(2階・地下2階)

教職員、大学院生、学部4年次及び3年次の後期(「卒業論文作成のための貸出許可願」の許可を受けた者)が利用できます。



休憩室(1・3階)

学習の合間に一息つきたい時に、休憩室でくつろぐことができます。1階の休憩室には自動販売機があります。



コミックコーナー(2階)

2019年9月にコミックコーナーを新設しました。勉強の息抜きや、一般図書へつながらるきっかけ作りにも利用できます。



AVコーナー(3階)

AV資料室にある視聴覚資料を、3名まで一緒に視聴することができます。個人席は44席あります(空き時間の映画鑑賞等によく利用されています)。



米軍ヘリ墜落事件関連資料室(2階)

2004年8月13日に本学に米軍ヘリが墜落した事件に関する資料(新聞・写真・映像等)を展示しています。平和学習の場として利用されています。



よい司書（図書館員）ってどんな人？

図書館長 山口 真也

昨年の5月頃のことです。授業が終わった後、1年生から「先生からみてよい司書ってどんな人ですか？」という質問があり、頭を悩ませましたが、こんなふうに答えてみました。

「本を並べるのが好きな司書かなあ」

司書の専門的な仕事はたくさんありますが、選書を行う上でも、レファレンスを行う上でも、イベントを考える上でも、まずは利用者が何を求めているのかを知ることが大切です。

利用者のニーズは、貸出統計からも把握できますが、「禁帯出」と呼ばれる、貸出できない辞書類やCD・DVDなどもありますし、プライバシー上の理由から借りられないけれど館内でよく読まれている資料もあります。（沖国の図書館には、貸出はできませんが、最終巻までまとめて読める「漫画コーナー」もあるんですよ）

以前は、貸出カウンターで利用者と接することでそのニーズを把握することが大切だと言われていましたが、最近（コロナ対策もあって）自動貸出機を導入している図書館も増えて、カウンターで利用者と接する機会が減ってきました。そうなると大事になってくるのが、返却本を棚に戻す作業です。

返本作業は本を元の場所に戻すだけの簡単なお仕事ではありません。乱れている棚を整理したり、傷んでいる本を発見したりすることで、統計には表れない利用者のニーズを把握することができます。本棚がある「フロア」は「利用者が主役の場」とも言われます。カウンターには気後れして問い合わせができないようなことも、返本中の司書になら気軽に質問できるとも言われています。

「フロアに出ることが好きな司書が本当の司書なのかもしれませんね」

さて、こんなことを偉そうに書いた私も一人の図書館員（司書）です。空いた時間があればフロアにも出ていきたいと思っていますので、何かわからないことがあったら、気軽に声をかけてくださいね。

私の図書館活用法

レファレンスサービスを利用して新資料を発見！

地域文化研究科南島文化専攻 2年次 宮里 初枝

2020年度から2年間、本学大学院で、黒澤亜里子先生のご指導の下、「久志芙沙子研究—マイノリティー集団における女性の視点から」と題する研究を行った。久志芙沙子とは、昭和初期の沖縄出身の作家であるが、未発見の作品がまだまだ多いと言われている。芙沙子が台湾に在住していた頃に、現地の新聞『臺灣日日新報』に短歌を投稿していたという情報があったため、未発見の作品がないか、マイクロフィルムを所蔵している本学図書館で調査を行うことにした。当初は自力で調査を行うつもりだったが、フィルムリーダーの操作が難しい上に、画面上の文字が小さく、年齢的なこともあってどうしても一人では調査ができなかったため、図書館のスタッフの方々が調査を代行して下さることになった。その結果、なんと3首もの新たな歌を発見することができた。

図書館には、利用者が知りたいこと・調べたいことをサポートする「レファレンスサービス」がある。沖縄国際大学図書館には、利用者一人ひとりが置かれた状況を考慮してサービスを考えてくださっている、心強い専門職の方々がいる。大学院を修了した後も、一人の研究者としてもっと有意義に図書館の資料やサービスを活用することができればと思う。

私の図書館活用法

法学部生の一例

法学部地域行政学科 2年次 金城 彩華

2年次の基礎演習クラスで課題が出されたとき、私が真っ先にすることは図書館のカウンターでPCの席を借りることでした。PCを利用する目的は、法学部生必携のデータベース『TKCローライブラリー』。図書館資料としても多数保管されている『判例百選』が電子書籍形式の綺麗な画像で閲覧できるほか、豊富なコンテンツが搭載されています。2021年度現在、データベースを閲覧できるPCは1階入口の2台のみ、さらに6月ごろは入館制限のため約75分しか館内に滞在することができず、興味の赴くまま別のコンテンツを見ていた私はいつも慌てて必要なほうのメモを取っていたものでした。調べ終わった後、記事に登場した文献を探すために本棚に行くと、その文献は初版から第六版まですべて揃えられて、書架に置かれています。私は記事のものと同じ版の文献を借り、閲覧席で課題に取りかかりました。以上が、一法学部生の図書館利用の一例です。

大学図書館をもっと身近に

総合文化学部日本文化学科 4年次 大城 アリーシア さくら

私は、学部在学中に司書課程と学校司書モデルカリキュラムを受講していました。資格課程の最後の取り組みとして、今年の3月に沖縄国際大学図書館を使って資料展示の実習を行いました。私たち4年生のグループが取り組んだテーマは「かせぐ・ためる・つかう」～大学生の大学生による大学生のためのおカネのはなし～。大学図書館は、授業に役立つだけでなく、私たちが抱える日常的な課題の解決に寄り添ってくれることをぜひ知ってほしいと思って企画しました。資料展は4月上旬まで図書館内で開催しています。Web上でもオンライン展示も行っていますので、ぜひご利用ください。



オンライン展示会場
はこちら!

私は4月から大学院に進むことになりました。これからも、日々の課題解決はもちろん、研究面でも図書館の資料や施設を大いに活用していきたいと思っています。

大学図書館のサービスを利用して

総合文化学部日本文化学科 2年次 石川 舞

沖縄国際大学の図書館には、米軍ヘリ墜落事件関連資料室があることをご存じでしょうか。資料室には、当時の様子を伝える写真や旧本館南壁画の一部が、当時のまま展示されています。黒く焦げたコンクリート片や、近隣住宅の写真は、当時を物語る貴重な資料です。しかし、私自身が入学後に詳細を知る機会が出来たように、これらの資料を学外の人が知るには難しいように思えます。大学で起きた事件・事故を継承するという観点から、デジタルアーカイブ化を進めることも、大学図書館の一つの在り方なのではないかと考えました。

その他にも、大学図書館には、レポート執筆の参考になる文献資料や、マイクロフィルム、AV資料が豊富にあり、利用者のニーズに応えてくれます。コロナ禍における対応として、電子書籍や映画などを提供するサービスが行われています。感染状況の拡大で、通学することが難しいときも、図書館が提供する電子サービスがレポート執筆の支えになりました。

また、利用者の知りたいことをサポートしてくれる図書館員の方々もいます。一人で解決できないときは、実際に図書館へ行き、図書館員の方々に質問や相談をしてみてください。優しく対応して下さり、学びの手助けとなるはずですよ。

電子サービスを有効に活用しつつ、大学図書館に所蔵されている資料を実際に見ることで新しい発見があると思います。ぜひ一度、大学図書館へ足を運んでみてはいかがでしょうか。

学科長が新生に薦める5冊の本

法律学科長 伊達 竜太郎

書名	著者名	発行所
① 法ってどんなもの？	大村 敦志	岩波書店
② ルールはなぜあるのだろう：スポーツから法を考える	大村 敦志	岩波書店
③ 法の世界へ〔第8版〕	池田 真朗	有斐閣
④ 法律学習マニュアル〔第4版〕	弥永 真生	有斐閣
⑤ 新・シネマで法学	野田 進	有斐閣

経済学科長 平敷 卓

書名	著者名	発行所
① 良き社会のための経済学	ジャン・ティロー 村井 章子訳	日本経済新聞出版社
② 基地と財政	川瀬 光義	自治体研究社
③ 子育て支援の経済学	山口 慎太郎	日本評論社
④ 絶望を希望に変える経済学	アビジット・V・バナジー & エステル・デュフロ 村井 章子訳	日本経済新聞出版
⑤ Learn Better —— 頭の使い方が変わり、学びが深まる6つのステップ	アーリック・ボーザー著 月谷 真紀訳	英治出版

企業システム学科長 李 相典

書名	著者名	発行所
① COSMOS	カール・セーガン	朝日新聞出版
② 恐怖の地政学—地図と地形でわかる戦争・紛争の構図	ティム・マーシャル	さくら舎
③ 本当の自由を手に入れるお金の大学	両@リベ大学長	朝日新聞出版
④ いちばんやさしいリスティング広告の教本 人気講師が教える自動化で利益を生むネット広告	杓谷 匠、田中 広樹 宮里 茉莉奈	インプレス
⑤ 菊と刀	ルース ベネディクト	光文社

日本文化学科長 桃原 千英子

書名	著者名	発行所
① 選択の科学 —コロンビア大学ビジネススクール特別講義	シーナ・アイエンガー 櫻井 祐子 訳	文藝春秋
② 知の越境法—「質問力」を磨く	池上 彰	光文社
③ 文学部唯野教授	筒井 康隆	岩波書店
④ 学校って何だろう—教育の社会学入門	苅谷 剛彦	ちくま文庫
⑤ 新編 教えるということ	大村 はま	筑摩書房

社会文化学科長 深澤 秋人

書名	著者名	発行所
① 古文書返却の旅 戦後史学史の一齣/中公新書 1503	網野 善彦	中央公論新社
② 旅する琉球・沖縄史	真栄平 房昭	ボーダーインク
③ 海東諸国紀 —朝鮮人の見た中世の日本と琉球	申 叔舟(著)、 田中 健夫(訳注)	岩波書店
④ 砂糖の世界史 岩波ジュニア新書276	川北 稔	岩波書店
⑤ 沖縄の歳月 自伝的回想から (中公新書 184)	比嘉 春潮	中央公論社

地域行政学科長 柴田 優人

書名	著者名	発行所
① 自分で考えるちょっと違った 法学入門〔第4版〕	道垣内 正人	有斐閣
② キヨミズ准教授の法学入門	木村 草太	星海社新書
③ 法学テキストの読み方	大橋 洋一	有斐閣
④ 法学学習Q&A	横田 明美、小谷 昌子、 堀田 周吾	有斐閣
⑤ カフェパウゼで法学を ——対話で見つける〈学び方〉	横田 明美	弘文堂

地域環境政策学科長 上江洲 薫

書名	著者名	発行所
① 変わる沖縄 —地域環境政策学の視点から—	沖縄国際大学 公開講座委員会編	編集工房東洋企画
② 地域と環境ありんくりん： 経済発展と快適環境の調和を目指して	沖縄国際大学 公開講座委員会編	編集工房東洋企画
③ サークュラーエコノミー： 企業がやるべきSDGs実践の書	中石 和良	ポプラ社
④ 沖縄経済と業界発展：歴史と展望	1950倶楽部 編	光文堂コミュニケーションズ
⑤ ポスト・オーバートゥリズム： 限界を再生する観光戦略	阿部 大輔編著	学芸出版社

産業情報学科長 上原 千登勢

書名	著者名	発行所
① IT・デジタルワーカーのための英会話	長澤 大輔・ ジョンレイナー	ベレ出版
② ロジカルメモ：想像以上の結果をだし、 未来を変えるメモの取り方	村本 篤信	アスコム
③ トップも知らない星野リゾート： 「フラットな組織文化」で社員が勝手に動き出す	前田 はるみ	PHP研究所
④ 英語解剖図鑑	原島 広至	KADOKAWA
⑤ プラナリア	山本 文緒	文藝春秋

英米言語文化学科長 里 麻奈美

書名	著者名	発行所
① オノマトペの謎 ——ピカチュウからモフモフまで	窪 蘭 晴夫	岩波書店
② ちいさい言語学者の冒険 ——子どもに学ぶことばの秘密	広瀬 友紀	岩波書店
③ 親子で育てる ことば力と思考力	今井 むつみ	筑摩書房
④ World Englishes—世界の英語への招待	田中 春美(編集)、 田中 幸子(編集)	昭和堂
⑤ Languages: A Very Short Introduction	Stephen R. Anderson	Oxford University Press

人間福祉学科長 平山 篤史

書名	著者名	発行所
① 夜と霧	ヴァクトル・E・フランクル 訳: 菊山 徳輔 訳: 池田 香代子	みすず書房
② 森田療法	岩井 寛	講談社
③ きよこ	重松 清	新潮社
④ 開かれた小さな扉 ——ある自閉児をめぐる愛の記録	バーニア・M. アクスライン	日本エディターズスクール出版部
⑤ 子どものための精神医学	滝川 一廣	医学書院

科目群責任者が新入生に薦める5冊の本

人間文化科目群 浦本 寛史

書名	著者名	発行所
① にぎやかな未来	筒井 康隆	角川文庫
② ブッタの教え一日一話	アルボムッレスマナサーラ	PHP文庫
③ 地球の歩き方「世界のすごい巨像」	地球の歩き方編集室	Gakken
④ サクッとわかるビジネス教養 地政学	奥山 真司監修	新星出版社
⑤ 考えの整頓「ベンチの足」	佐藤 雅彦	暮らしの手帖社

国際理解科目群 上江洲 律子

書名	著者名	発行所
① 星の王子さま	サン＝テグジュペリ	新潮社 ※他にも翻訳多数あり
② 文盲	アゴタ・クリストフ	白水社Uブックス
③ 記憶なき民	ヴィクトル・セガレン	水声社
④ 表徴の帝国	ロラン・バルト	ちくま学芸文庫
⑤ 黒い皮膚・白い仮面	フランツ・ファン	みすず書房

外国語科目群(英語以外の外国語) 岡野 薫

書名	著者名	発行所
① やさしく読めるスペイン語の昔話	松下 直弘	NHK出版
② 音で味わう韓国語の名文・名作	イムチュヒ(訳・朗読)	HANA
③ 人造美人：星新一脳洞小説集	星 新一	訳林出版社
④ フランス歳時記 生活風景12か月	鹿島 茂	中公新書
⑤ ねこと私とドイツ語ラント	ながらりょうこ	小学館

外国語科目群(英語) 阿嘉 奈月

書名	著者名	発行所
① Who moved my cheese?	Spencer Johnson	Vermilion
② 外国語を話せるようになるしくみ	門田 修平	SBクリエイティブ
③ イングリッシュ・モンスターの最強英語術	菊池 健彦	集英社
④ ちいさい言語学者の冒険	広瀬 友紀	岩波書店
⑤ ことばの発達の謎を解く	今井 むつみ	筑摩書房

社会生活科目群 仲地 健

書名	著者名	発行所
① 幸福論	ヒルティ(著) 草間 平作(翻訳)	岩波文庫
② パパラギ はじめて文明を見た南海の酋長ツイアピの演説集	エーリッヒ・ショイマン(著)	SB文庫
③ 知的生産の技術	梅棹 忠夫(著)	岩波新書
④ 知的生活の方法	渡部 昇一(著)	講談社現代新書
⑤ 競争社会の歩き方 自分の「強み」を見つけるには	大竹 文雄	中公新書

情報科目群 大井 肇

書名	著者名	発行所
① エssenシャル思考 最少の時間で成果を最大にする	グレッグマキューン	かんき出版
② 世界一やさしい問題解決の授業	渡辺 健介	ダイヤモンド社
③ これからの世界をつくる仲間たちへ	落合 陽一	小学館
④ どこでも誰とでも働ける	尾原 和啓	ダイヤモンド社
⑤ 反応しない練習 あらゆる悩みが消えていくブッダの超・合理的な「考え方」	草薙 龍瞬	KADOKAWA

キャリア教育科目群 島袋 伊津子

書名	著者名	発行所
① 学歴分断社会	吉川 徹	ちくま新書
② 教育とキャリア	石田 浩	勁草書房
③ 正規の世界・非正規の世界——現代日本労働経済学の基本問題	神林 龍	慶応義塾大学出版会
④ 解雇規制を問い直す	大内 伸哉・川口 大司	有斐閣
⑤ 失われた場を探して——ロストジェネレーションの社会学	メアリー・C・プリントン	NTT出版

自然環境科目群 山川 彩子

書名	著者名	発行所
① 完本 毒蛇	小林 照幸	文藝春秋
② 海洋危険生物 沖縄の浜辺から	小林 照幸	文藝春秋
③ 沖縄の自然を知る	池原 貞雄・加藤 祐三	築地書館
④ 沖縄独立を夢見た伝説の女傑 照屋敏子	高木 凜	小学館
⑤ 青い目が見た大琉球	ラフォーシュ・上原 正稔	ニライ社



***** 2021(令和3)年度 図書館活動 *****

月 日	行 事	内 容
4月1日(木)	図書館報『でいご』 第55号発行	年1回発行
4月2日(金)～	4月5月おすすめ本テーマ 「新生生におすすめする本」	新生生におすすめしたい本を集め、紹介しました。 
4月15日(木)～ 5月24日(月)	令和3年度 新生生オリエンテーション	新生生に、図書館を有効に使ってもらうことを目的に、図書館の機能や利用方法等を紹介しました。 
4月27日(火)～	シラバスに掲載している資料の 電子ブック版をウェブ上で公開	シラバスに掲載している資料の電子ブック版をウェブ上で紹介しました。
5月13日(木)～	Maruzen ebook Libray 試読サービス提供開始	Maruzen ebook Libray 電子ブック約70,000 タイトルの試読サービスを開始しました。 
6月2日(水)～	6月おすすめ本テーマ 「レポート・論文作成に役立つ本」	レポート・論文作成に役立つ本を集め、 紹介しました。 
6月9日(水)～	図書館職員がおすすめする 電子ブックの紹介	ご自宅からも読書を楽しめるように、図書館職員がおすすめする電子ブックをウェブ上で紹介しました。 
6月18日(金)	「ヨミダス歴史館」 データベースオンライン講習会	データベース利用促進のため、学生・教職員を対象にオンライン講習会を実施しました。
6月22日(火)	「Gale Academic One File」 データベースオンライン講習会	データベース利用促進のため、教員を対象にオンライン講習会を実施しました。
6月25日(金)	「日経バリューサーチ」 データベースオンライン講習会	データベース利用促進のため、学生・教職員を対象にオンライン講習会を実施しました。

月 日	行 事	内 容
7月12日(月)～	7月おすすめ本テーマ 「レファレンス」	図書館での調べ方のコツがわかる本を集め、紹介しました。 同時に、オンラインレファレンスも紹介し利用促進に努めました。 
8月6日(金)～	8月おすすめ本テーマ 「平和を思う」	沖縄の平和や米軍ヘリ墜落事件に関連する資料を集め、紹介しました。 
8月16日(月)～ 8月25日(水)	蔵書点検	点検は、参考和書・就職・資格試験対策図書・ゼンリン地図・留学生用図書を対象にしました。
9月1日(水)～	9月おすすめ本テーマ 「図書館に行かなくても読める本」	ご自宅からも読書を楽しめるように、図書館職員がおすすめする電子ブックをウェブ上で紹介しました。 
9月2日(木)	「TKC ローライブラリー」 データベースオンライン講習会	データベース利用促進のため、学生・教職員を対象にオンライン講習会を実施しました。
10月1日(金)～	10月おすすめ本テーマ 「本で旅する」	コロナ禍でも旅行気分に入れそうな本を集め、紹介しました。 
11月1日(月)～	11月おすすめ本テーマ 「文学受賞作品コレクション」	10月27日から始まる読書週間に合わせ、文学賞受賞作品を集め、紹介しました。 
11月1日(月)	図書館ウェブサイト 「電子ジャーナル&データベース」 ページリニューアル公開	「電子ジャーナル&データベース」利用促進のため、図書館ウェブサイト「電子ジャーナル&データベース」ページをリニューアルし公開しました。
11月8日(月)～	Maruzen ebook Libray 試読サービス提供開始	Maruzen ebook Libray 電子ブック約70,000タイトルの試読サービスを開始しました。 
11月15日(月)～ 11月19日(金)	ステップアップガイダンス	学部生・院生を対象に、図書館をより効率的に活用してもらうために「論文検索」「就活に役立つ図書館活用法」をテーマにガイダンスを実施しました。

月 日	行 事	内 容
11月29日(月)	AED講習会	サニクリーン様にご協力頂き、利用者が安心安全に施設をご利用できるようスタッフ全員がAED使用方法や胸骨圧迫等を体験し、スキルを身に付けました。 
12月1日(水)～	12月おすすめ本テーマ「2021年という1年」	2021年を振り返ることのできるテーマで本を集め、紹介しました。 
12月16日(木)	令和3年度沖縄国際大学図書館書評・映画評賞表彰式	応募総数23編の応募があり、最優秀賞1編、優秀賞4編、佳作8編の入賞が決定致しました。 
1月4日(火)～	1月おすすめ本テーマ「2022新たなはじまり」	「はじまり」に関連する本を集め、紹介しました。 
2月1日(火)～	2月おすすめ本テーマ「ホップ・ステップ・ジャンプ」	春休み期間中、新しいことに出会えるように様々なテーマで資料を集め、紹介しました。 
2月1日(火)	沖縄国際大学図書館 you tube チャンネル開設	図書館の各種機能や利用方法について動画コンテンツを公開しました。
2月8日(火)～ 2月28日(月)	譲渡会	図書館で不要になった資料の有効活用のため、学生・教職員の皆さんにお譲りしました。 
3月8日(火)～	「学校図書館情報サービス論」受講生による企画展示	日本文化学科開講科目「学校図書館情報サービス論」受講生による企画展示を行いました。

コロナ禍の図書館サービス

2021年度の図書館サービスは、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、主に「事前予約制入館サービス」を提供致しました。学内での新型コロナ感染拡大を受け「事前予約制入館サービス」を停止した際は「メールによる貸出サービス」を実施し、学修や研究を継続できるように対応いたしました。また、シラバスに掲載している資料の電子ブック版をウェブ上で紹介、各種オンラインガイダンスの実施、電子ジャーナルやデータベースをご自宅からも利用できるように非来館型サービスの充実に取り組みしました。

感染拡大防止のため、利用者の皆様には図書館を存分に活用して頂くことができずご不便をおかけしておりますが、引き続きご理解・ご協力をお願い申し上げます。

現在提供している図書館サービスは、右記のQRコードを読み取りご覧ください。



LIBRARY TOPICS

2021年度「いつでも」「どこでも」ご利用可能なデジタルコンテンツを充実させました。電子ブック・動画配信サービス「CINEMO」等、その他にもデジタルコンテンツを導入し、サービスは拡大中です。また、ご自宅からでも図書館利用等について質問できる「オンライン・レファレンス」サービスも始めました。是非、みなさんの学習や研究に役立ててください。

電子ブック

ご自宅からでも、スマホやタブレット等のブラウザで電子ブックを読むことができます。電子ブックの詳しい利用方法は、右記のQRコードまたはURLから確認してください。



<https://www.okiu.ac.jp/library/ebook>



丸善雄松堂が提供する全分野の学術図書やビジネス書等を取り揃えています。



紀伊国屋書店が提供する新刊小説等の一般書を取り揃えています。



紀伊国屋が提供する学術和書、特に沖縄関係の書籍(おきなわ文庫等)を取り揃えています。



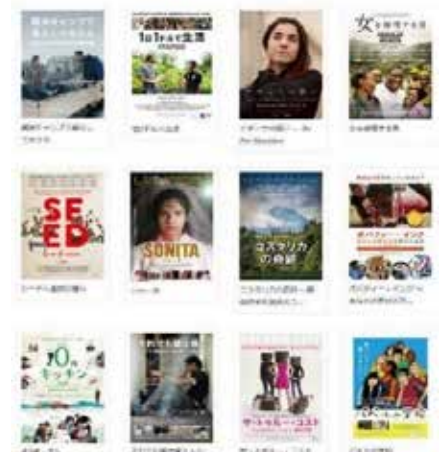
ProQuest社が提供する幅広い分野とコンテンツの洋書を取り揃えています。

動画配信サービス

世界中の「イマ」を切りとった選りすぐりドキュメンタリー作品17作品が鑑賞できます。講義の教材としても利用され、現代社会を考える手助けになります。

【鑑賞方法】

- ① 右記のQRコードまたはURLにアクセス
<https://edu.cinemo.info/login.html?gid=23>
- ② IDとPasswordを入力する。
IDは沖国大ポータルログイン時のIDで、PasswordはそのログインIDに「okiu1972」を続けたものです。
観たい映画をクリックし、スタートをクリック!



最優秀賞1編、優秀賞4編、佳作8編に決定

沖縄国際大学図書館書評・映画評賞は、本学学生の読書・映画鑑賞活動の向上を図ることを目的として、より多くの学生に図書館利用を奨励促進するため、平成18年度から実施しています。

令和3年度は、23編(書評22編、映画評1編)の応募がありました。

図書委員会で厳正に審査した結果、最優秀賞1編、優秀賞4編、佳作8編の入賞が決定し、令和3年12月16日(木)に、図書館1階ブラウジングコーナーに於いて表彰式を開催しました。新型コロナウイルス感染防止対策の一環で最優秀賞と優秀賞の受賞者のみご参加頂きました。

表彰式では、上江洲図書館長から各受賞者に賞状と副賞が手渡され、受賞作品について講評をいただきました。

その後、入賞者を代表して、最優秀賞を受賞した総合文化学部人間福祉学科3年次の城間唯さんから受賞のことが述べられ、最後に記念撮影を行いました。

すべての受賞作品は本学リポジトリ(本学学生の作品)で読むことができます。



最優秀賞

(年次は受賞時)

城間 唯(人間福祉学科 心理カウンセリング専攻 3年次)
書評:不条理の雨の中で

優秀賞

仲本 陽(日本文化学科 3年次)
書評:時代を映すフィクションの魅力

赤嶺 桜(人間福祉学科 心理カウンセリング専攻 3年次)
書評:自分らしく生きるとは何か

玉那覇 長輝(地域産業研究科 地域産業専攻 1年次)
書評:『利他』と『利己』を巡るメビウスの輪

名嘉真 里歩(日本文化学科 1年次)
書評:『本と鍵の季節』からみる物事の本質について

佳作

玉山 心(英米言語文化学科 3年次)
書評:湿地の少女の生き方から

新里 勇人(人間福祉学科 心理カウンセリング専攻 3年次)
書評:『世界のエリートがやっている最高の休息法』を読んで

宮城 藍空(経済学科 2年次)
書評:愛すること、人生の最高価値

照屋 真白(人間福祉学科 心理カウンセリング専攻 3年次)
書評:『糖尿病のケアリング』を読んで

柴田 香黄(英米言語文化学科 1年次)
書評:やっぱり本は読むべき

天久 聖菜(人間福祉学科 心理カウンセリング専攻 2年次)
書評:生きて死せる者たちよ

黒島 萌花(日本文化学科 2年次)
書評:均等の難しさ

山城 鈴香(人間福祉学科 心理カウンセリング専攻 3年次)
書評:特別でない病


書評 最優秀賞

「不条理の雨の中で」

総合文化学部 人間福祉学科 3年次 城間 唯
(年次は受賞時)

本書はアルベール・カミュがペストという感染症の流行、そしてその状況下において医師や神父、新聞記者など様々かつ異なる立場にいる人間がどのように感じ、またどのように生きたかを綴った長編小説である。

物語は港町オランで見られたペストの兆候を語るところから始まる。ネズミの大量死という異常な事態の発生、そして熱病の相次ぐ報告。医師リユーはその熱病をペストだと判断するものの、役所側はあくまでも「ペストの流行を見据えた対応を取ろう」という結論を出す。その対応が曖昧なものであり、現在起こっている事態と正面から向き合うものでなかったことが描写されている。中盤からは感染の拡大によりオランの封鎖と通信手段の制限、それに伴う人々の混乱、そしてその中でも未だ楽観的にふるまう人間の存在と、やがて事態の深刻さを理解した後訪れる長い封鎖生活への怯えが描かれる。そしてそのような生活の中で、人々は自身の哲学と置かれた環境にそれぞれの形で向き合い、ペストの流行の中で生きていくのだ。

原書は1947年に出版されており近年出版された本という訳ではないのだが、2021年現在、新型コロナウイルスの流行のさなかにある私たちの生活や状況と重なる点も存在しており、そのような視点で読み進めていくことも可能な一冊である。

まず私が「似ている」と感じた点としては、ペストという名の不条理の形が挙げられる。本書において不条理は、雨の如く集団へ降りかかったものであった。オランという物語の舞台にいた人間全員に対して突如降りかかった不条理である。そうして集団へ降りかかった不条理を描く本書の中には、当然多くの登場人物が存在する。医師や新聞記者、旅行者、密売人、神父など、様々な人物の持つ様々な感情が描かれているのだ。そしてこの物語が集団の物語であるからこそ発生する行動や想いを読み取ることが可能である。この本ではペストの流行とその収束までもが描かれているが、収束後の人々の心持ちには大きな違いがあった。端的に言うと、ペストにより大切なものを失った人間と、そうでない人間の違いである。大切なものとは恋人や家族、時間や資産など様々であるが、そのような喪失体験をした人々はペストの収束を手放しでは喜ばない。悲しみと嬉しさが入り混じった心を抱えながら、活気を取り戻しつつあるオランの町を歩くのだ。しかしそれとは反対に、ペストの収束をただただ喜ぶ人間もまた存在する。このような「差」が生まれること、生まれたことこそが、集団へ降りかかった不条理だからこそ発生した現象ではないだろうか。そして現代においてもこの「差」はそこそこに見られる。人々の従事する職業やその立場によって新型コロナウイルスの流行から受ける影響の大きさや種類が異なっていたり、そもそも個人間における新型コロナウイルスへの認識にも大きな差がある。このように、不条理が集団へ降りかかったものであるということ、またそれにより「差」が生まれるということは現代と本書の間における類似点だということが出来るとはならないか。

しかし当然、本書の中で描かれるペストと新型コロナウイルスのそれぞれの流行やその中で生きる人々の生活や状況においては相違点もまた存在している。

まず、このペストという病が港町オランで流行しているものであるということだ。オランのみでの流行は、言い換えればその外はペストの脅威のない世界だとも言うことが出来る。しかしコロナウイルスは現在全世界で流行しており、その流行の程度や措置の違いはあれども、特定の地域から脱出できればその不安がなくなるというよう

なものではない。人々のワクチンの接種が完了していないことや、今現在コロナウイルスに対する特効薬がないことなどにより、コロナウイルスの脅威から完全に逃れ得る場所は存在しない。今の私達における安寧の地とは、地球上のどこかの地域ではなく、コロナウイルスが流行する前の過去にしかない。つまり、世界中で猛威を振るうこのコロナウイルスという流行り病において、「どこか」という「場所」に安心はないのだ。この点は本書における人々のおかれた状況と、現代社会との大きな違いといえるであろう。しかし地球全体がオランと同じひとつの鳥かごの中にあると見るのならば、それは共通点ともなり得る。いくら別の場所を練り歩いたところでオランの住民がこの町とペストから逃れることが出来なかったように、私達も同様、様々な国や地域へ行っただとしてもコロナウイルスの存在しない地域はなく、あるのは流行の程度の差だけであり、逃れることは出来ない。本書の中でペストが流行した「オラン」という町、その枠を、自身を囲っているどの枠において当てはめるかという選択により、この点は共通点にも相違点にもなり得るだろう。

次の相違点としては、心理職の不在が挙げられる。本書においてはその時代背景も合わさり、心理職の人物が登場しない。つまり、このペストの流行に対する不安や大切な人を失った悲しみに対し、そのケアを行うことが出来る専門職が存在しないのだ。結果として、オランの人々はそれらの悲しみや不安から自分自身の力だけで立ち直ることを強要されてしまう。ただでさえ孤立する状況の中に加え心のケアを行うことの出来る専門職が存在しないこの状況は、オラン市民の心理状態を相当追い詰めたであろう。先述の通り本書において心理職は存在しないため、「どのように人々に関わっていけばいいか」というような具体的な指標を得ることは難しい。しかし心理職がいなかった場合どのような状況になるのかという視点で読めば、また新たな学びを得ることが出来るのではないだろうか。

このように、コロナウイルスの流行する現代と本書「ペスト」の中には、相違点や類似点その両者において、様々な関連性を見出すことが出来る。環境や時代に差はあれど、同じ感染症の流行する世の中でどのように生きていくのか、生きていきたいのかということを考えるきっかけになれるだろう。

また、どのように生きていくのかという点に関しては、本書にある描写の中からそれらを考えるきっかけを直接的につかむことが出来るのではないかと私は考えている。その描写とは、端的に言うところ「英雄やヒーローなる人物は存在しない」というものである。この物語において、特別な力を持った人間は存在しないのだ。後の歴史において勇敢であったと語られることはあろうとも、その人物の生活は劇的でドラマチックなものではなく、ただ淡々とペストと向き合い続け、自身の仕事を行っただけである。個人個人の努力は尊敬に値するものであり、それを「英雄」や「ヒーロー」といった言葉で表現するのなら存在すると言えるが、行き詰った状況をたった一人でひっくり返すことが出来るような特別に選ばれた「誰か」は存在しない。特別な力ではなく、真摯な態度と人々の行動の積み重ねこそが、ペストを収束へ導いたのだ。新型コロナウイルスの流行下にいる我々においても同様のことが言えるだろう。特別な「誰か」を待つのではなくひとりひとりが真摯な態度でこの感染の流行に向き合うこと、そして自分自身に出来ることを誠実にこなしていくことで、私達はこの不条理の雨の中に、一筋の晴れ間を見つけることが出来るのではないだろうか。

【参考資料】 『ペスト』 カミュ著、三野博司訳（岩波書店）2021年


書評 優秀賞

「時代を映すフィクションの魅力」

総合文化学部 日本文化学科 3年次 仲本 陽
(年次は受賞時)

現実とは思えないほどの苦しみに耐える生活が続く時期に本書に出会った。いつもの伊坂幸太郎作品ではあるが、コロナ禍を過ごす我々にとっては、苦しい日々を耐えているからこそ得られるご褒美のように感じる。

本書は2021年10月に販売された伊坂幸太郎による書下ろしの長編作品だ。主人公の壇千郷（だんちさと）は中学の国語教師で、ある条件を満たすと他人の翌日起こる出来事を少しだけ見ることができるという能力を持っている。しかし、壇は普通の先生のように生徒と関わっていた。そんなある日、壇は能力を使い里美大地という生徒を救い、そこからサークルと呼ばれる謎の団体と関わり始め、ストーリーはとある事件へと進んでいく。

これだけ見ると、いつもの伊坂幸太郎作品であるように思える。主人公が大きな問題へと巻き込まれていく話は、既に「ゴールデンスランバー」などで描かれており、主人公が特殊な能力を持っているという設定は、「魔王」などで描かれている。著者自身、「ペッパーズ・ゴースト」の公式サイトに掲載されている公式著者インタビューで、「今回は得意な部分全部乗せなんですよね。」と語っている。

しかし、私はこれまでの伊坂作品とは違う魅力を本書に感じた。それは、作中の様々な点がコロナ禍の経験を連想させるものだからである。まず、わかりやすいのは主人公の壇の能力だ。能力が発動する条件は、「飛沫による感染」となっている。相手の飛沫を浴びることで、その人の翌日を見ることができるという能力だ。インタビューによると、執筆時期とコロナウイルスが中国で流行していた時期が重なっていることがわかる。どこで誰から感染したのかわからず、急に知らない誰かの翌日を見てしまうことに苦労していた時期もあるようだ。正にウイルスの感染に対する恐怖と重なる。壇の父もこの能力を経験しており、まだ誰も、本人すら見ていない場面を、先行的に観ることができることから「先行上映」と名付けた。壇はトラブルに巻き込まれながらも、この「先行上映」を使って問題に向き合わなければならなくなる。今の私たちには考えられないが、とある人物の翌日の情報を得る為にカラオケに誘導し、自ら飛沫を浴びる行為に出たりする。この物語の中では直接的にコロナ禍の苦しみを描くことはないが、壇は大学生の頃に三年近く世界中が麻痺状態となった「パンデミック」を経験している。「学生時代の友人たちはマスクの顔で思い出すことが多い」という言葉にはドキッとさせられる。

本書は物語の構造も特徴的で、その一つは「作中作」である。壇はとある女子生徒から、自作の小説を受け取り、本書ではその小説が物語に大きく関わってくる。猫に虐待をする動画配信を支援していた猫を地獄へ送る会、通称「ネコジゴ」。そのメンバーを成敗する二人組の「ネコジゴハンター」が主人公の物語だ。悲観的な性格で常にネットニュースをみて様々なことに対して心配している「ロシアンブル」と、正反対で楽観的な性格の「アメショー」が活躍する。アメショーは都合よく事が進むことがあったりすると「僕は、誰かが書いているお話、たとえば小説か何かの一登場人物に過ぎない、そう思うことがあるんですよね」と語る。自分を他の誰かが監視しているという感覚が、本書においては重要な意味を持つ。

もう一つ重要な存在がある。それが、「サークル」と呼ばれるグループだ。この物語では数年前に五人の男たちが店内にいた人々を巻き込み、計29人が亡くなったという悲惨な爆弾テロ「カフェ・ダイヤモンド事件」が起こった。その被害者遺族の集まりがサークルだ。この事件では犯人も命を落としているため、サークルのメンバーは怒りをぶつける対象がない。サークルと事件については、メンバーである成海彪子（なるみひょうこ）

の目線で語られる。事件が起こったのが五年前の五月二十二日であることから、メディアでは「ゴー点ニーニー」と数字の並びのように言われているようで、わたしの両親のような人たちまで記号化されるように感じ、命を奪われた彼らの無念さが消えてしまうと語っている。コロナ禍では、楽しみにしていた様々なイベントや、個人での計画、伝統的な行事までもが延期、中止になる事態が頻繁に起こった。それも特定の誰かのせいではない、ウイルスのせいである。「カフェ・ダイヤモンド」という名前もあの船を思い出す。また、テレビやネットのニュースではその日の感染者数やコロナによる死者数が毎日のように数字で表されていた。

壇は、里美大地の父がこのサークルのメンバーであることから、このグループに関わっていくことになり、壇とロシアンブルと成海の三人の目線で物語は進んでいく。ある時、壇は先行上映でサークルが怪しい計画を立てていることを知る。だが、そんな壇をサークルは監禁する。そこで助けに来てくれるのがネコジゴハンターの二人だ。サークルのメンバーは心を支えてくれる存在の羽田野（はたの）という男を飲酒運転の車に撥ねられるという形で失い、耐えられなくなり爆弾テロを起こしてその中で死ぬという計画を実行しようとしていた。更に、カフェ・ダイヤモンド事件では、犯人や警察の対応が責められていたが、事件を実況していたマイク育馬（いくま）にも問題があった。無責任に警察の動きを実況したことで犯人が焦って悲惨な結果になった可能性がある。サークルの数人のメンバーにとって育馬は唯一の怒りの対象となり、そのメンバーは育馬への復讐を計画していた。最終的に壇とネコジゴハンターと成海は、それぞれ目的は違うがそれを阻止するために協力する。

タイトルの「ペッパーズ・ゴースト」とは、映像の技術で、照明とガラスを使い、別の場所に存在するものを観客の前に映し出す手法である。壇は小説の中だと思っていたネコジゴハンターが目の前に現れた時にこの言葉を思い出す。コロナ禍でもこの言葉は当てはまる。日本で感染が広がり始めた初期、政府の発言や報道などではこのウイルスを「見えない敵」「見えない恐怖」と表現していた。しかし、すぐに終わると思っていたこの生活が想像以上に続き、時間がたつにつれ政治家や芸能人、若者の行動、国の対応と、敵は見える形に変わった。いつしか世の中は感染対策の為の行動に加え、人の目が気になり、感染が拡大する前より自分の行動が誰かに見られているという感覚が増した。そんな中で、報道されていたような身勝手な行動は許せないという気持ちもあるが、見えた敵を追い込むような世の中に恐怖を感じた。自粛期間、退屈で不満ばかりの同じような日々が続き、繰り返す緊急事態宣言、嫌なニュースばかりの毎日に本当に終わりが来るのか不安になる。しかし、本書はそんな現実にとある本を使って希望を持たせてくれる。ニーチェの「ツアラトウストラ」だ。登場人物のほとんどがこの本について、特に「永遠回帰」について語る。人間はずっと同じ人生を繰り返す。つらい目に遭い困難にぶつかった人がどれほど努力して乗り越えたとしても、またいつか同じことを味わう。本書はこれに更にニーチェの文章を引用する。『人生で魂が震えるほどの幸福があったなら、それだけで、そのために永遠の人生が必要だったんだと感ずることができる』と。私はこの一文で救われたと感じた。日常が戻るまでもう少し耐えてみようと思えた。

小説を含むあらゆる創作物には生を肯定する力がある。特にこの「ペッパーズ・ゴースト」では、どこまで著者が意図しているかはわからないが、コロナ禍に生きる私たちの苦しみを別の形で描き、さらにそこに希望を見出してくれた。この経験をしてきたからこそ捉えられる物語がそこにはあり、それを読めることに喜びを感じた。本書は、これまでの伊坂幸太郎作品の魅力を詰め込みながら一時代の苦労を反映させた非常に意味のある小説ではないだろうか。

【参考資料】『ペッパーズ・ゴースト』 伊坂幸太郎著（朝日新聞出版）2021年

引用：『ペッパーズ・ゴースト』公式サイト（10月29日閲覧）

https://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=&cad=rja&uact=8&ved=2ahUKewi1qc70s-3zAhXYed4KHZrCCxoQtwJ6BAgGEAM&url=https%3A%2F%2Fpublications.asahi.com%2Fpeppers_ghost%2F&usq=AOvVaw0SWQy6pvcN_Vw8m7dZjrF4


書評 優秀賞

「自分らしく生きるとは何か」

総合文化学部 人間福祉学科 3年次 赤嶺 桜
(年次は受賞時)

はじめに私たちは今、「普通」の人と「同じように」できることが「当たり前」で「普通」にできない人は「普通」になれるように「努力」しなければならない世界で生きていると考える。しかし、それは「その人らしさ」を潰し、その人の生きている世界を「地獄」に変えてしまうと私は考える。当書は、同じ世界に生きていても自分が感じている世界と自分以外の誰かが感じている世界は「異なる」のだということを感じさせ、「自分らしく生きる」とは何なのか、ヒントを与えてくれる1冊となっている。

まず、皆さんは「発達障害」がどのようなものであるかご存じだろうか。発達障害について宮尾は、生まれつきの障害で脳の機能になんらかの先天的な問題があり、さまざまな症状や問題行動があらわれて、不適応の状態になることがわかっていると述べている。また、その原因として、言葉、音、味、痛み、温度などの情報を受け取り、それに応じた指令を全身の各部に送り、行動や生命維持のコントロールを行う脳や神経系に障害があることを挙げており、その障害のために、認知（ものの見方・考え方・情報処理）の発達や機能に遅れがでたり、生活や学習面に問題が生じてしまうと述べている（宮尾,2017,pp36-37）。また、発達障害を持つ人に関して、本田は発達障害を持つ人の周囲の人の理解不足や不適応な対応が原因で本人に強いストレスがかかり、いじめや不登校、身体症状や精神症状などのさまざまな「二次障害」が起こることがあると述べている（本田,2018,pp22）。

以上のことから、発達障害とは生まれながらにして脳に障害があり、認知の発達や機能に遅れが表れ、日常生活に問題が生じてしまい、周囲の人の理解と支えがなければさらに問題が生じてしまうものであることが分かるだろう。では、具体的には一体どのような問題が生じてくるのだろうか。

当書の著者の1人であるアスペルガー症候群当事者の綾屋さんは、幼い頃からうまく人とつながることや自分自身の体が何を訴えているのかを聞き取ることができないなど様々な問題を抱えている。その例を以下に記す。

綾屋は、外で人と会う時には「普通のフリ」を必要とし「まとも」に見えるように振る舞ってしまうという外部から社交を強いられている暴力性を感じている。さらに、「普通のフリ」を終えた後には、本当の自分が何なのか分からなくなり、周囲の人に疎外されないため、好印象を与えるためには毎回無理をしなければならないかと苦しくなり、しばらくひきこもることになると述べている。また、幼い頃の体験として、はじめての集団生活になる幼稚園児時代に、だれとだれとだれが、どんな気持ちで、どんなルールで、いつまでに終わるつもりで、一緒に過ごしているのかなどの状況の中での人の意図がわからず、つねに疑問符と不安のなかにおり、居場所がなかったと述べている。また、そのことに関して綾屋は、尋ねても、対話によって状況の解説をしてくれる人が周囲におらず、「『今、何が起きているのか』をだれかが解説してくれれば、私は現状を把握できるはずである」という不満や怒りがつねにあり、そのせいで今日に至るまで、集団の輪の中に交ざることができずに過ごしてきたと述べている（綾屋・熊谷,2019,pp120-122,pp128-130）。

ここで問題なのは、幼い綾屋さんが困っていることを主張しているにも関わらず、それに対して周囲の人が適切な対応をしていないことである。幼い彼女の主張を流すのではなく、理解する努力をし、できる限り適切な

対応をすることができていれば、彼女は人と関わる上で「普通のフリ」をしながらこんなにも苦勞せずに済んだと考えられる。そして、上記では述べなかったが綾屋さんは、大学卒業後の10年後に「アスペルガー症候群」という診断を受けており、それまでは彼女自身なぜ人とうまくつなげられないのかが分からない状態が続いていたにも関わらず、人とつながることを諦めずに、自分に合った「手話」という方法で人とのつながりを持つことに挑戦し続け、「自分らしく」生きていた。確かに、彼女は「普通のフリ」をすることで自分を見失うこともあったかもしれないが、彼女の生き方はまさに「自分らしい」生き方であるとしか言いようがない。それは、彼女が人と関わるために耳は聞こえるが「手話」を使いながらコミュニケーションを取るという「彼女らしい」手段を見つけ、使っているからである。しかし、その方法は誰から勧められたわけではなく、時間をかけて自分で見つけた方法であり、支援を受けて助かりましたという話ではない。

私は、このことについて周囲の人が綾屋さんという1人の人間を少しでも理解しようとし、寄り添ってくれる大人が1人でもいれば、彼女が人とつながることの困難さをもっとはやく緩和し、彼女が「自分らしく」生きることをもっとはやく促すことができたのではないかと考えてしまう。そして、当書にはもう一人の著者がいる。それは脳性まひ当事者であり、脚が不自由な熊谷さんである。彼は綾屋さんと大学時代からの友人であり、綾屋さんという1人の人間を認めており、彼女と共有できる部分を持っている。自身の脳性まひにおける体験について熊谷は、18歳のときに親の手助けがなくても1人で生きて行けるように、1人暮らしを始めた。それまで身の回りのことは全て親任せであったため、はじめの試練である便意や尿意に襲われた際に、トイレに這って行ってなんとか便座につこうとするも失敗した。しかし、リフォーム業者さんと何度も試行錯誤しながら、トイレと自分の行動のパターンを少しずつすりあわせ、トイレとつながることに成功し、ついでシャワールームとつながり、玄関とつながることができた。そのつながりかたは多くの人とは似ても似つかないものではあるが、闇雲に「普通」の所作を真似ようとしていたリハビリ時代よりも自動的な習慣として動かすことのできる身体を手に入れたという実感があると述べている。また、熊谷は、多くの人とはできあいの同じパターンを取り込むことで、互いにつながっている感覚を得ることができると述べているが、同じ身体ではない以上、完全に同じパターンを共有できるわけではないため、自身のパターンを一度分解し、異なる身体をもつ他者の世界に思いを馳せながらこの本を読んでもらうれしいと述べている（綾屋・熊谷,2019,pp205-209）。

以上のことから私は、人とつながるといのは互いに互いの存在を認め合いながら、完全には理解できなくても理解しようとするところから始まるのではないかと考える。綾屋さんと熊谷さんは、互いに人とつながることについて似ているが同じではない困りごとを抱えているが、それでも二人は互いにつながりを持っている。それは、お互いが相手を認め、支え合いながら生きるというスタンスを持っているからだと考える。

最後に、この世界中の全ての人が「普通の人」という概念を捨て、みんな1人1人違うのが当たり前で、「普通」になるための努力をする人が1人でも減り、互いに自分とは異なる他者を認め合いながら支え合って生きていけるようになることを心から願うばかりである。

【参考資料】 『発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつながりたい』 綾屋紗月、熊谷晋一郎著（医学書院）2019年
綾屋紗月、熊谷晋一郎（2019）. 発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつながりたい 株式会社 医学書院出版 pp120-122,pp128-130, pp205-209.
本田秀夫（2018）. 発達障害がよくわかる本 株式会社 講談社出版 pp22.
宮尾益知（2017）. 発達障害の基礎知識 株式会社 河出書房新社出版 pp36-37.


書評 優秀賞

『利他』と『利己』を巡るメビウスの輪

地域産業研究科地域産業専攻1年次 玉那覇 長輝
(年次は受賞時)

家族や友達の何気ない言葉や存在に救われ、ふとした悪気のない言動に傷つく。そういう経験が呼び起こされる。私も良かれと思った善意が「偽善」と言われ、何気ないふるまいが周りの支えになっていたと事後的に気づいた経験がある。また、他者への貢献や寄与には、「褒められたい」「良いことしていれば自分にも返ってくる」そういった利己的な意識がつきまとう。利他と利己はメビウスの輪のように表裏一体。「利他とは何か」は、私たちの生活に深く関わり複雑で深淵な問いである。コロナ禍で孤独に苛まれた私たちにとって、「利他」の再考は重要な可能性も秘めているという。本著では「利他」から派生する問題について、五人の教授により多角的な視点で考察されている。

第1章では美学者の伊藤亜沙が利他の本質を解きほぐしてくれる。利他には、「情けは人の為にあらず」のような合理的な利他がある。これがいわゆる「利己的な利他」だ。本章では視覚障害者のケアについて、例が挙げられている。視覚障害者の障壁として、「障害者を演じなきゃいけない窮屈さ」があるという。これは、障害者自身が健常者の思う「正義」のための道具になってしまうということだ。健常者の「ここに段差がありますよ」「ここは図書館です」のような教えはありがたいこと。しかし、それが過剰になると自分の聴覚や触覚を使って自分なりの世界を感じることができなくなってしまう。無自覚に相手を支配しようとしてしまう危険がはらんでいる。伊藤も「特定の目的に向けて他者をコントロールしようとするのが利他の最大の敵」と指摘している。「これをしたら相手の利になるだろう」が「これをするのだから相手は喜ぶはずだ」に変わり、さらに「相手は喜ぶべきだ」と変化していく。人は自己犠牲で成り立つ利他ほど、その見返りを求めてしまう生き物なのかもしれない。そして、伊藤は利他の危険性を踏まえうたえで「うつわ的利他」を推奨している。失敗を許容する姿勢。計画倒れをどこか喜ぶ余裕。予想外や不都合に対応する為に、余白を作っておく。これが「うつわ的利他」である。

第2章では、政治学者の中島岳志が「利他はどこからやってくるのか」というテーマで利他の根源に迫る。その中で、中島がインドでの興味深いエピソードを紹介している。中島がインドニューデリーの駅で重い荷物を持って階段を歩いていると、一人の男性が荷物運びを手伝ってくれたという。中島は「ダンネワード(ありがとう)」「バフットダンネワード(ほんとにありがとう)」と続けて、感謝を述べた。しかし、男性はムツとした表情で、そっけない態度をしたという。なぜ、彼は感謝を率直に受け止めなかったのか。これは、インドの慣習に関係がある。インドでは日常語に「ありがとう」という言葉は流通していない。だからといって、他者を助けない訳ではない。道に迷う人がいれば周りの人たちが集まり、皆が道を教えてくれる。しかし、道を尋ねた人は感謝を伝えないし、道を教えた人たちも「ありがとう」を求めている。これがインドの慣習である。そこから、マルセル・モースの「贈与論」やポトラッチの「贈与と負債」を例に挙げ、利他とは「オートマティックなもの」と表現している。つまり、利他は無意識に生まれるということだ。この結論は、議論が分かれる点だろう。それでは、自発的な行為が否定され、息苦しく感じてしまうかもしれない。私は自発的な利他も、無意識に生まれる利他も人としての大事な素養だと思っている。ただ、「オートマティックな利他」は生まれ育った環境や慣習に左右され、行為者と受け手の価値観がずれていけば、衝突を生み出すことにもつながりかねない高度なコミュニケーションだと感じた。

第3章では、随筆家の若松英輔氏が「美と奉仕と利他」で民藝を例に、視点を変えて利他を分析している。主に、宗教哲学者の柳宗悦の世界観を利他と結びつけて紹介している。柳は美しいものを見るという行為を通じて、個々の心の中に内なる平和を実現しようという「民藝」の世界観を唱えた。ここで重要なことは、柳が「利他」という言葉を直接使わずに、美の中にある利他を伝えようとしたことだ。若松は柳の哲学を「言葉には避けがたい宿命があります。ある物事を語ることによって照らし出すとともに、語り得る領域に限定するということが同時に起こる。ある対象を明示すると同時に、そのものの本質から人を遠ざけ、理解を阻害してしまう側面がある。」と考察している。私もこの一説に共感した。人は言葉にできない現象や感情にこそ価値を生み出し、言葉にできない瞬間を大事にしていると思う。言葉にするとこぼれ落ちてしまいそうなもの、人には伝えられない私だけの感動の瞬間は誰にだってあるのではないか。利他もそういうものなのかしれない。言葉では伝えきれない利他こそ尊い。

第4章では、哲学者の國分功一郎氏が「中動態」という概念を「利他」と結びつけて、展開している。中動態とは古代のインド＝ヨーロッパ語に存在し、能動態と受動態の対立の外にある概念であるという。どういうことか。例えば、「欲する」という言葉は現代の英語に訳すと“I want”となり、能動態である。しかし、よく考えてみると、「水が欲しい」と思ったとき、私たちの心のなかで水への欲求が高まり、能動的とは言えない。むしろ、内なる欲求に突き動かされており、受動的とすら言える。このように、受動でも能動でもない、内なる心からうまれるものが中動態である。國分は、中動態に「利他」の本質が隠れているのではないかと説いている。本章では意思と責任の概念にも触れ、少々難解だが利他の本質を哲学で紐解いてくれる。

最終章は、小説家の磯崎憲一郎氏が小説の中に潜む「利他」を解説して締めくくる。歴代の小説家は「利他」を敏感に描写している。偉大な小説は、「設計図のない物語」として、出来上がっていくそうだと。これは、第1章の「うつわの利他」につながる。磯崎は「書いているうちに、どんどん予期せぬ流れが作られていって、違う方向に行ってしまった。まっすぐに進むはずだったところへ脇にそれる獣道のようなものが見えたとき、書き手はその獣道へ入り込む誘惑に抗えない。しかし、そういう冒険をしながら書き上げた作品にこそ、大きな力が宿っている気がしてならないのです」と説いている。当初の構成に余白を作り、予期せぬインスピレーションをくみ取ることで、物語が作りあげられていく。小説も人も、余白をつくり、外側にあるものと共にことを生成していくことが大事だということがよく分かる。

最近では、テレビニュースや新聞で「ケア」という言葉を目にすることが多くなった。これらの報道を通じて思うことは、ケアは可視化されにくい問題であるということだ。報道ではケアラーが家庭の世話に追われ、拠り所のない精神的苦痛に焦点が当てられている。ただ、ケアは誰もが当事者になる問題で、スケールや状況は無数のグラデーションがあり、事後的にしか分からないケアだってある。そう考えると、自分の存在が誰かのケアにつながっているのかもしれないし、知らぬ間に自分がケアされているのかもしれない。そして、ケアと類比的に使われる「利他」も無意識に生まれている。だからこそ、日頃から自分の振る舞いに気を使い、周りへ感謝することが大事であると感じた。

表題の問いや疑問を解消するには、本著を読むだけでは腑に落ちない。深く自分の経験や生活に当てはめ、「利他とは何か」と向き合ってみると、自分なりの答えを導くことができる。あなたにとっての「利他」とは何なのか。日常に潜む「利他」の深淵と面白さに気づかせくれる一冊になっている。私は世界が「利他」で溢れていると信じている。身の回りの利他探しを試してみるのも面白い。

【参考資料】『「利他」とは何か』 伊藤亜紗、中島岳志、若松英輔、國分功一郎、磯崎憲一郎著（集英社新書）2021年

書評 優秀賞

『『本と鍵の季節』からみる物事の本質について』

総合文化学部 日本文化学科 1年次

名嘉眞 里歩

(年次は受賞時)

本書は、米澤穂信による図書館を舞台にした青春ミステリー小説である。持ち込まれる謎に男子高校生二人が挑んでいく全6編の物語だ。

本作は、「僕」こと堀川次郎の視点で物語が描かれる。堀川は、高校二年生で図書委員をしている。お人好しな性格のため、頼み事をされやすい。そんな堀川と出会ったのは同じ高校二年生で図書委員の松倉詩門。松倉は背が高く、顔も良く、快活でよく笑うが、妙に大人びていて、皮肉屋である。そして堀川は、松倉の事を「これが同じ高校二年生かと思うほど分別くさいことをいうかと思うと、意外に間が抜けたところがある」と評価している。そんな性格も物の見方も違う二人が、謎を解決に導いていくところが本書の一番の見所だ。

本のタイトルにあるように、「本」と「鍵」にまつわる短編の6作で構成されている。

1作目の「913」では、図書室にいる二人のもとへ突如謎が持ち込まれる。図書委員を引退した浦上麻里が、二人に「アルバイトをしないか」と話を持ち掛ける。それは、「死んだ祖父が遺した金庫の鍵を開けてほしい」というものだった。つまり、「開かずの金庫」の解錠である。手掛かりは祖父が生前に口にした言葉。それを頼りに、金庫の解錠方法を堀川と松倉が協力して探っていくストーリーになっている。

2作目の「ロックオンロッカー」では、図書室に謎が持ち込まれるわけではなく、二人は偶然ミステリアスな場面に遭遇する。堀川は、知り合いを紹介すると割引になる行きつけの美容院の割引券を持っていたため、堀川が松倉を誘い、一緒に散髪に行くことから始まる。「貴重品は、必ず、お手元にお持ちください」という店長の言葉。その言葉と店長の不自然な接客。二人がそれらに引っ掛かりを覚えたところからミステリーが幕を開けていく。

3作目の「金曜日に彼は何をしたのか」では、テスト期間に学校の窓ガラスが割られたことにより始まる。テスト期間だったため、誰かがテストの問題を盗もうとしたと言われる。そのテスト問題を盗もうとしたと疑われたのが、図書委員の後輩植田登の兄だったのだ。植田登の兄である植田昇は、素行不良で知られている。そのため真っ先に疑われてしまう。しかし、兄の昇にはガラスを割られた日のアリバイがあるという。登は、兄の無実が証明できる証拠と一緒に探してほしいと二人に頼む。そして、小さな手掛かりをもとに証拠を探していく。

4作目の「ない本」では、堀川と松倉が、「3年生が自殺したらしい」という話を図書室でしている時に3年生の長谷川が訪ねてくる。長谷川は、自殺した香田が最後に読んでいた本を探しているという。長谷川先輩によると、香田先輩は本が好きで、自殺をする何日か前にある本を読んでいたらしい。さらに便箋みたいなものとシャーペンが机に置いてあり、その便箋を読んでいる本に挟んだように見えたそうだ。長谷川先輩はその便箋が香田先輩の遺書なのではないかと考え、その本を二人に探してほしいと頼む。長谷川先輩の記憶を頼りに最後に読んでいた本を見つけだすために二人が奮闘する。

5作目の「昔話を聞かせておくれよ」では、放課後の図書室で雑務に勤んでいた堀川に、新聞を読んでいた松倉が「昔話をしよう」と持ち掛ける。テーマは「宝探し」。先攻の堀川は、小さい頃のプールでの苦い思い出を話す。後攻の松倉が話出したのは、6年前に起きたある自営業者と泥棒の話、それからその後日談だった。松倉の話は、昔話と言いながら、今に繋がる話でもあった。6年越しの「宝探し」。堀川は、松倉のまだ終わっ

ていない「宝探し」を手伝う。ただの暇つぶしで始めた「昔話」が、謎へと変わっていく。5作目は、松倉の過去と考え方がよくわかる話になっており、物語の最高潮の回であると言える。その分、他の回よりも分量が多くなっている。

6作目の「友よ知るなかれ」は、5作目の「昔話を聞かせておくれよ」と繋がっている話である。堀川と松倉のものの見方、考え方の違いがわかる回である。6年越しの「宝探し」をする中での二人の意外な苦悩。そして、6作目では今まで以上に二人の友情関係に注目していただきたい。

本書の見所は3つある。見所の一つ目は、堀川と松倉の友情関係である。お人好しで何事も信じて疑わない堀川とすぐに疑うことから入ってしまう松倉という正反対のキャラクターを登場させている本書。一人だけでは解けない謎をものの見方、考え方が違う二人がそれぞれの視点で謎を見る事で解決に導くことができる。お互いがお互いをカバーしあうことで謎が解けるダブル探偵制という珍しい形を取っているため、謎を解いていく過程が面白く、目が離せない。仲は悪くないが、特別仲が良いわけではなく何かのきっかけで関係性が壊れてしまいそうな距離感を保つ二人。近すぎず、遠すぎずのほどよい距離感を保つ二人の関係性は、謎を解いていく事で深まっていく。しかし、二人の関係性は、5作目と6作目で少し不穏な空気になる。青春時代特有の絶妙な空気間が表れている。本書は、二人の友情関係自体が一つの大きなミステリーになっていると言ってもいいだろう。2人の関係性にぜひ注目していただきたい。

見所の二つ目は、堀川と松倉の会話である。そのテンポとノリの良さに驚かれるだろう。頭の良さを感じさせる言葉選び、軽妙なトーク。読んでいて心地が良い。クスッと笑えるような会話と推理をする時の真剣な会話とのギャップも読み応えがある。謎解きだけに注目するのではなく、二人の会話に注目することで謎解きの息抜きや青春小説の色を強めてくれるだろう。

見所の三つ目は、何と云ってもやはり、ミステリー小説ならではの、ミステリーとしての面白さである。伏線が少しずつ散りばめられており、その伏線一つ一つが謎を解決していく鍵となる。それらを見逃してはならない。紐解かれていく謎に読者のあなたは引き込まれるだろう。さらに、本書は高校2年生の堀川の視点で描かれているため、読みやすく、ミステリー初心者やミステリーに苦手意識のある人でも本の世界に入り込みやすいことも特徴だ。また、短編集のため、伏線がすぐに回収される点においても読みやすい。巧みな技によって予想できない展開を生み出す米澤穂信は、我々読者の期待を裏切らない。

予想もできない展開で今まで信じていたことが覆される本書。そこから学べることは、物事の本質は、自分が見てきたものが全てではないということである。物事の表面だけに注目するのではなく、何が本質なのかを見極める必要がある。つまり、物事は、一つの視点から見るとはならず、様々な側面から物事を見て判断すべきということである。そのためには、思い込みや先入観に捉われずに物事を見た方が良さだろう。それは、日常生活でもいえるのではないだろうか。例えば、目の前にある情報を一つの角度からしか見ず、他の情報を取り入れずに、目の前にある情報だけが真実だと思い込むことは、物事の本質を見極めることができない。そこで、本書は様々な側面から物事を見て何が本質かを見極める必要があることを教えてくれる。

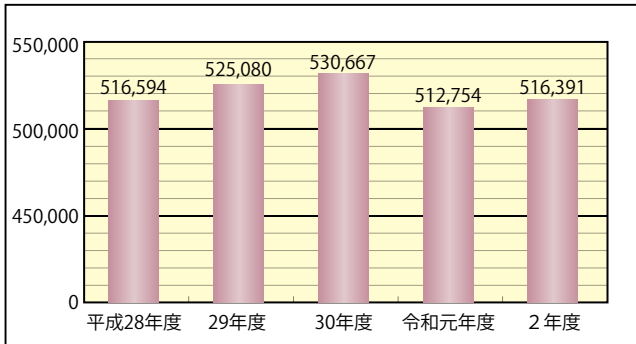
本書は、ミステリー好きはもちろん、青春小説好きの方でも読みやすい一冊となっている。

さて、ここまで私は、本書の書評を書いているが、それが本当か、もしかしたら自分の信じていたものが覆るかもしれない。本書を手に取り、その本質を自分自身の目で確かめていただきたい。

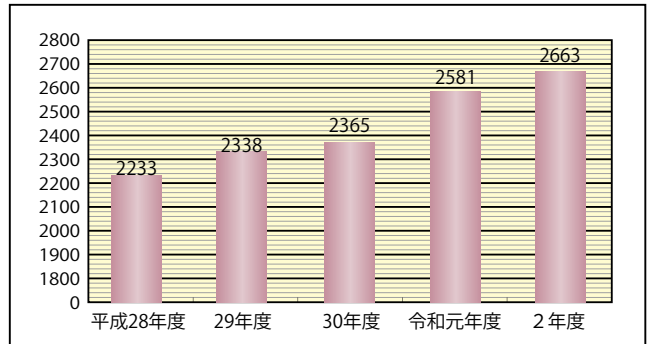
【参考資料】『本と鍵の季節』 米澤穂信著（集英社文庫）2021年

◆ 2020 (令和2) 年度 図書館統計 ◆

年度別図書館資料構成



年度別学術雑誌資料構成



◆ 2020 (令和2) 年度 図書館利用状況 ◆

1 学科別図書貸出利用状況 (紙書籍)

学部	項目	図書貸出	
		冊数	人数
法学部	法律学科	445	159
	地域行政学科	384	138
	法学部計	829	297
経済学部	経済学科	571	161
	地域環境政策学科	399	152
	経済学部計	970	313
産業情報学部	企業システム学科	509	176
	産業情報学科	230	74
	産業情報学部計	739	250
総合文化学部	日本文化学科	3,577	952
	英米言語文化学科	1,528	419
	社会文化学科	2,507	864
	人間福祉学科	2,983	833
	総合文化学部計	10,595	3,068
	学部計	13,133	3,928
大学院	法学研究科	349	102
	地域産業研究科	132	31
	地域文化研究科	1,300	291
	大学院計	1,781	424
その他	研究生	0	0
	科目等履修生	69	24
	その他講習生	2	1
	学外	8	3
	専任教員	1,753	425
	非常勤教員等	407	107
	事務職員等	1,026	490
	その他計	3,265	1,050
	合計	18,179	5,402

2 文献複写利用状況

文献複写件数	797件
文献複写枚数	4,369枚

3 参考業務状況 (比率)

区分	学生	教職員	学外者	合計	比率
文献所在調査	55	3		58	38.1%
事項調査	9	1		10	6.6%
利用指導	77	7		84	55.3%
合計	141	11		152	100%

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、2020年度は学外者の図書館利用を停止

4 開館日数・入館者数状況

開館日数	186日
入館者数	6,067人

5 相互利用 (ILL) 状況

	依頼	受付	計
相互利用	485	1,064	1,549



6 学年別図書貸出状況 (紙書籍)

年次	学生数 (令和2年5月1日現在)	貸出冊数	貸出人数	一人当貸出冊数 (貸出冊数/学生数)	一回当貸出冊数 (貸出冊数/貸出人数)	一人当貸出回数 (貸出人数/学生数)
1年	1,293	1,720	658	1.3	2.6	0.5
2年	1,303	1,786	636	1.4	2.8	0.5
3年	1,360	4,383	1,216	3.2	3.6	0.9
4年	1,432	5,244	1,418	3.7	3.7	1.0
全学年	5,388	13,133	3,928	2.4	3.3	0.7



図書館Webサイト

図書館YouTube

図書館Twitter

2022(令和4)年4月1日発行

沖縄国際大学図書館

〒901-2701 沖縄県宜野湾市宜野湾二丁目6番1号

TEL.098-892-1111(代)

運用実務担当(内線2106~2108)

FAX.098-893-3274